

(1) 長距離バスと線の旅

小生、小さい頃から、がキ太将、冒険好きとして育ち、高校3年の時(昭和50年)には、大分市内の障子岳で「遭難騒ぎ」を起こし、大分合同新聞の3面記事トップやOBSにも登場したこともあるような人間ですから、この2月、3月の旅行も、学生時代のような冒険的で非常に面白い旅となりました。1月、2月、3月と夏休みでしたので、この莫大な時間と自由が得られたことに感謝しながら(点ではなく)線の旅、すなはちバスによる旅を試みました。

地図を見て頂ければ

おりかりのように、日本列島の数倍もある距離をバスで移動し、最終的には、2万1000km、280時間もバスに乗っていました。北海道・稚内ー鹿児島・太陽半島が2,200km、東京~オーストラリア・シドニーが7,800km、リオ・デ・ジャネイロからサンセルス至由の東京までが2万kmですから

はるはる日本まで、バスで帰ったのと同じことになり

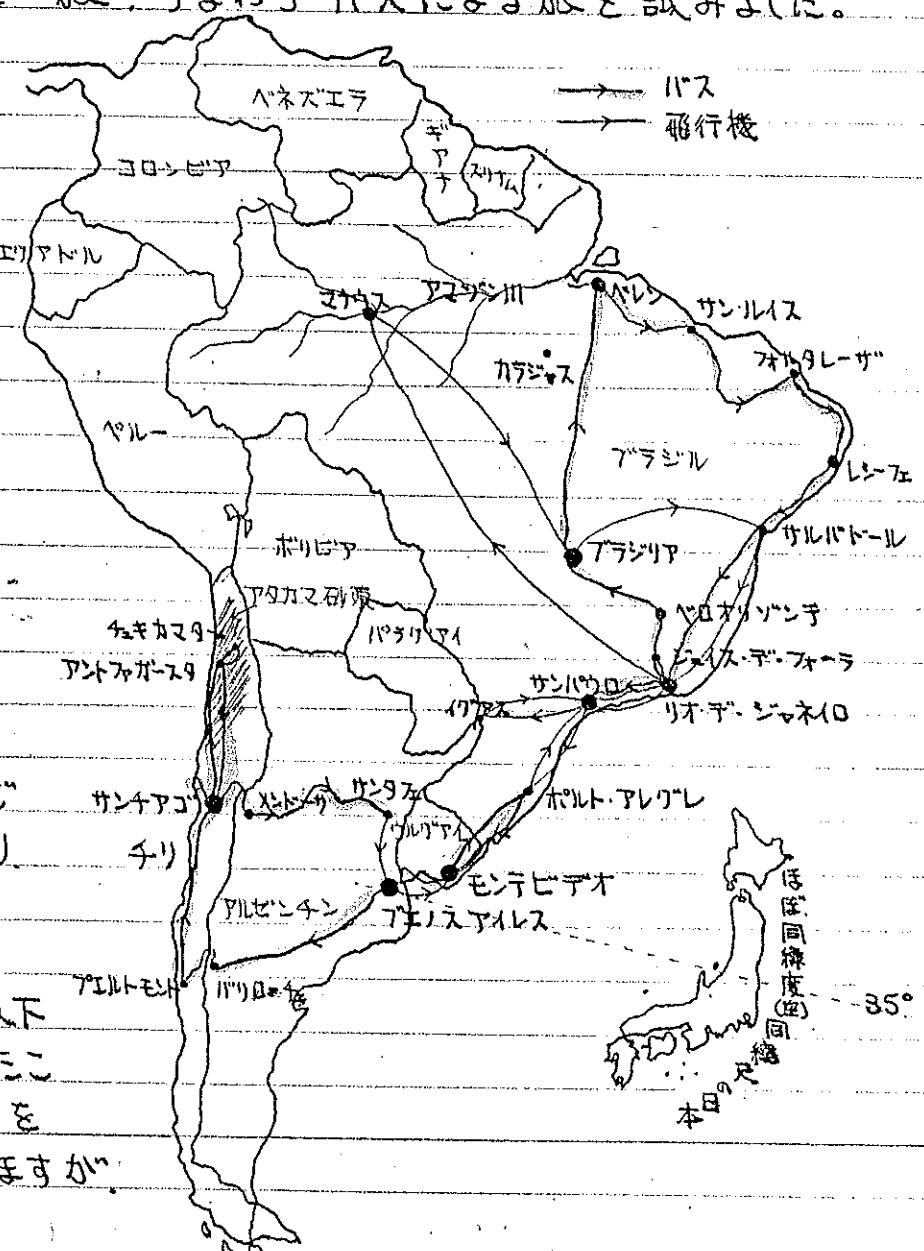
その気の遠くなるような

阿呆さ加減がおわかり

頂けるかと思います。以下

では、この線の旅で見たこ

と、感じたこと、考えたことを記してゆきたいと思いますか。



まずはじめに、線の旅を可能にしてくれた長距離バスについて、お話し致します。

ブラジル・アルゼンチン・チリ 3国に共通しているのは、長距離バス路線が驚くほどに発達していることです。この発達を可能ならしめている原因は、① 時間でお金を貰う階層（中流以下）が沢山存在し且つ移動の需要があること、②（現在では莫大な費用をかけて補修する必要がありますか）大都市を結ぶ道路網がよく発達していること、③ アンデス山脈の周辺を除いて、南米大陸の南半分は起伏が非常に少なく、^{それが} 80km～120km/時という高速運転が可能であること、④ 国土の割には、交量が少なく、従って渋滞というものが存在せず、時間の正確さを保障できること、⑤ 所得水準が言って、飛行機は庶民にとって高嶺の花であり、鉄道が発達していないこと、などが挙げられるのではないかと思われます。

余談になりますが、日本的感覚の「長距離」では信じられないような超長距離バスが、全国各地を結んでいます。正とえれば、ブラジルにおいては、サンパウロやリオから全国至る処に直通バスが毎日何本も出ており（勿論、その逆方向もしかりです）、サンパウロからアマゾン下流のペレンまでは、3000kmもあるのですが、この距離を、一台の直通バスが昼夜休みなく、3日間 60時間もかけて走るのです。ですから、サンパウロのバスターミナルは、日本でいえばちょうど東京駅、リオのそれは、ちょうど大阪駅とでも言えましょうか。そこでは、東京駅におけるアルートレインや新幹線の送り迎えの如きの光景の如く、涙を流しながら恋人を送る人、久しぶりの子供や孫の帰省に、笑みを満面に浮かべて迎える老夫婦の姿などが見られます。

これらの国では、日本のような車検制度がなく、それ故、今にも壊れてしまいそうな年代ものの車が数多く走っているのですか？この長距離バスだけは別格で、各バス会社自慢のデラックスバスか、その雄姿を見せててくれます。トイレも完備され、座席も非常にゆったりとしています。（しかし、過本主義の需要と供給の関係、市場メカニズムとは、非常

によくしたもので、この長距離バスにも普通の座席ばかりで、40~50人乗れるバス（エコ）ミーラスと言えましょうか）と、夜になると寝台になる非常に快適な座席（飛行機のファーストクラスを想像して戴ければよろしいかと思います）ばかりで、20人乗りのバスがありまして、後者の料金は、前者のそれの倍になってします。ブラジルでは、エコミーバスの運賃は、航空運賃の1/8、寝台バスのそれは、1/4ほどになっています。（今や航空運賃と鉄道運賃が大差なくなってしまった日本では信じられない話です。）それ故、人々の経済的地位とその利用する交通手段とは、見事な相関関係をもつておらず、日本のように貧乏学生と会社の重役とか、同じ飛行機で隣合わせになるといったような光景は皆無と言ってよいでしょう。中流以下の人々は時間と根性でお金を貰う為、エコミーバスしか利用しませんし、中流以上の上のクラスで時間的に余裕のある人は寝台バス、そして上流階級は、近距離以外、ほとんど飛行機を利用します。特にブラジルのバス料金の安さは驚異的で、東京～大阪（約500km）くらいの距離ですと、日本円にして1,200円程度です。これは、3国の中では、平均的にブラジルが一番貧しく、物価水準、とりわけ賃金水準が異常に安いことが原因です。アルゼンチンやチリのバス運賃は、ブラジルの1.5~2倍なのです。上に書きましたように、両国が、ブラジルに比べると、物価、賃金水準が高いことと、飛行機における機内サービスを彷彿させる車内サービス（車内に、スチュアーティスのような女性が1~2名おり、飲み物と朝・昼・夜食のサービスを受けられます）があり、それ故、運転手の交代時を除くと、ノンストップで目的地に到着できるという効率の高さが、その要因でしょう。（ブラジルでは、このような車内サービスがない為、2~3時間毎に10分前後休憩し、昼食・夕食事は40分前後停車することになり効率がよくありません）

何か些細なことはばかり書いてしまい恐縮ですが、夜中に、幾台ものバスとすれ違う時など、「ああ、今日も人々と、その夢を乗せて走り続けてるんだなぁー」などと感動する小生なのでした。

(2) 各国の自然と社会

6

さて、長距離バスによる線の旅のお蔭で、首都や大都市のみならず、かなり広範に亘る地域を見聞することができましたので、以下では各国の自然と社会について見にこと感じたことを書いてゆきたいと思います。

[ブラジル]

まず改めて、国土の広さを見せつけられました。ジュイス・デ・フォーラからペロオリゾンテ、ブラジリア、ベレンへとブラジル内陸部を北上するにつれ、窓の外に広がる景色は、温帶性植物の多い地域から、だんだんサバナ気候、熱帯雨林気候へのそれへと変化していく。また四方はどこまで行っても地平線に囲まれています。

予想外だったことは、ブラジル高原の起伏はほとんどないと言っても過言でない程、平坦な高原・台地が果てしなく続いていることです。日本の〇〇高原といふ感覚の近長線上で考えていたのでは大きな誤りで、土壤や水利それに気象条件などを考慮に入れなければ機械化耕作可能な広大な耕地となり得ます。(申し分けありませんか、勉強不足故現時点では、土壤はどうであるか、また、どのような作物・植物の栽培が可能か等について、ここに記すことは出来ません)

この広大な高原の中に忽然と現れるのが首都ブラジリアで、人によつては、「ブラジリア建設といふ余分な投資か、債務大国になった元凶だ」となどと言う人もあり、確かにその面も否定はできませんが、アマゾン川流域やブラジル高原開発の前衛基地として、又、それ自体新時代を担う近代的政治都市として建設されたブラジリアの存在なくして、先に述べた道路網の充実や、(屋々としてはありますか現在進みつつある)内陸部開発を語ることはできません。もし仮に、ブラジルが現在破竹の勢いで發展しているならば、このブラジリア建設は、「先見の明あり!」として、絶賛されていることでしょう。孰れにしても、ブラジリア建設を夢物語ではなく、実現したというブラジルらしい勇気は、今の日本など見做う

べきところでないかと思われます。

「ブラジル政府は、工業化を中心に近代化・先進国化を推進しようとしていますか」この「ブラジル高原を見てみると、「ブラジルの可能性」と言われるものは、実は「世界の食糧庫」としてのそれではないかと思われてきます。現時点における開発は、莫大な資金が必要とされる故、累積債務に悩まされている以上、かなり困難かと思われますか、仮に先進国まで巻き込んだ食糧難が到来した際には、必ずやこの「ブラジル高原が注目されることでしょう。これもまた、現時点ではかなり期待薄の仮定ですか。世界経済における、保護貿易主義を伴わない相互依存関係が増々深まり、且つ、ブラック・アフリカ諸国の近代化が進んだ場合、その地理的・地政学的環境から、食糧庫としての「ブラジルが重要視されることは間違いないと思います。(しかし現時点では、2重、3重の仮定が必要なのですから、空論に過ぎないかもしれません)

とにかく、現在の経済的破綻を一刻も早く解決し、世界の動勢に重要な影響を与える「大国としての一歩を早く踏み出すことが大切だと思います。

経済的危機の解決策については、小生なりの意見を持っていますが、これは、1年間の「ブラジル生活を経た時点での総括として報告したいと思いますので、ここでは割愛させて戴きます。

次は、社会について感じたことですが、「ブラジルという国はとにかく格差の大好きな国だということです。リオやサンパウロを見るだけでも、個人的な所得格差や教育水準格差などを強く感じますが、全国を回ってみると、その地域格差(州による貧富の差)、及び同一地域内における都市部と非都市部の格差が異常に大きいということに気がつきます。先進国であるか否かの指標のひとつに、都市部と農村などの非都市部における所得、教育、文化水準の差が小さいことなどがありますか。米国やスウェーデンを一方の極におけるば、「ブラジルは、リオやサンパウロなどの近代都市もあるだけに、きっともう一方の極に位置してしまうのではないかと思われます。

内陸部やアマゾン川流域などは、まだまだ原始的生活を営んでいるところが多々、一番驚いたのは、この原始的生活の主体がインディオやそれとの混血ばかりでなく、白人系の人もかなり多いということでした。これらの白人は、祖先もしくは本人たちが、「金鉱」などの一発を狙って、内陸の奥深くへ入っていったものと思われます。金鉱採掘に従事する人々が大半を占める町に立ち寄りましたが、住む人ほぼ全員の目つきがみんなにも悪い町を見たのは、小生もはじめての経験でした。実際、この付近の町々は、単位人口当たりの殺人件数が一番多いということです。

過程において
アラジル全体の生活水準を向上させるには、その~~地域格差~~、こういった地域格差、都市と非都市の格差を無くさなければならぬと思うのですが、「じゃあどうすればいいんだ」という段になりますと、あまりにもその格差が大きいので、小生も現実的な解決策を見出せないというのか正直なところです。

[アルゼンチン（ウルグアイ）]

自然環境で両国に共通することは、（アルゼンチンのアンデス山麓を除くと）山がなく、そのほとんど全部が平坦な平野・平原だ、ということです。我々日本人は、海や山に囲まれて育っているせいか、「仕切り」みたいなのがないと、なんとなく落ち着かないのですか、この両国には全く仕切りがなく、果てしない平原が続いています。そしてこの広大な平原で、小麦の栽培や牧畜が行なわれています。アルゼンチンなど、国土こそ日本のおよそ倍程度ですか、可耕面積たるや、その数十倍にもなるでしょう。全く美しい限りです。

また、アルゼンチン・ウルグアイは緯度的に日本と同じである為、アラジルと違って、四季の変化を感じられます。小生が行った3月は、夏の終わりから秋口にかけてですか、アエロスアイレスから、さすがに南西に下ったバリローチェという町では既に秋が訪れていました。人生訓や、人間関係において、よく「はじめ」ということが強調されますか、四季のほとんどないアラジルに住んでいますと、

この四季の変化といふものが、我々温帯に住む人をして、「けじめ」を感じしめているのではないかと思われます。とにかく久々に、温帯を感じることができた日々でした。

さて、両国の社会についてなのですか。まず、ごく僅かな情報によるイメージの形成が如何に危険なものであるか、如何に正確を欠くものであるかということを痛感させられました。南米に来て以来、南米の知識を十分に得ていなかった小生の勉強不足を棚に上げるわけにはいきませんが、両国を見るまでは、ウルグアイは貧しい農業国、アルゼンチンは、累積債務450億ドルをむかえることから、ブラジルを少しだけ小規模にしたような貧しい国ではないかと思っていました。しかも、新聞の報道なども、アルゼンチンに関する記事は、軍政のこと、インフレに悩まる市民のデモに関するもの、累積債務の返済と、国内経済政策について IMFとアルゼンチン大統領が話し合ったこと、などがほとんどで、上に述べたイメージを固定させていました。しかし、「百聞は一見に如かず」とは、本当によく言ったもので、この両国の豊かさは、ブラジルどころか、総合的には、日本すら及ぶところではありません。しかし、「豊かさとは何ぞや?」に対する答えは、千差万別ですから、以下では、ブラジルや日本を比較の対象として意識しながら、感じたこと、見たことを書きます。

まず、両国人種構成ですが、ほとんどラテン系の白人です。それ故、治安が極めてよく、日本にいるのと同じ程度の気楽さで過ごせます。(小生、黒人に対する偏見を持っているわけではありませんか? アメリカやブラジルなど)を見ていますと、黒人の数に比例して犯罪件数が多く

現実問題として

なっているように感じられます。)また、ブラジルが、基本的にはヨーロッパ文化だけれども、全体としては、混居文化と言え得るのに対し、この両国は、ヨーロッパそのものです。この両国に関する限り、「植民地」という言葉は、字義通り、民の移住の地~~である~~、ラテン民族か、その子孫とその文化を~~ある~~、~~ある~~継承存続させている新天地であって、少なくとも現在において~~は~~、我々が一般的にイメージしてしまう過去は知らず

両国を見てみると、植民地という曾ての状態は

帝国主義的収奪の対象としてのそれとはほど遠い感じがします。両国では、公園、道路、住宅、公共施設等の社会資本の充実が目覚しくどんな田舎(?)町に行っても、見すばらしい家は全くなく、町並は美観を保っています。また、モンテビデオやブエノスアイレスには、日本に戻ったのでは?と間違える程、多種多様な商品が溢れています。

・またしても余談になりますが、小生いわゆる喫茶店の数は、豊かさの指標ではないか?」といふ仮説を下しています。日本でも、所得水準の上昇に伴って喫茶店が増えていました。小生の見るところアルゼンチン・ウルグアイ・チリ・ブラジルの順に「豊か→貧しい」となるのですが、大都市における喫茶店の数も(全部数えたわけではありませんが)この順なのです。ブラジルなど"Bar (バー)"と書いて、立ち食いそば屋ならぬ立ち飲みビール屋みたいな店は、至る處にあるのですか。日本での喫茶店に当たるのは、ほとんど皆無です。

話を元に戻しまして GNP や一人当たり GNP という数字では、日本には遠く及ばないのですが、住宅環境の充実や公園の一人当たり面積など、一人当たりの社会資本享受などを考慮に入れますと、はるかに豊かな国のように感じられます。特に住宅に関しては、あれだけ一所懸命に働いても 3DK のマンションにしか住めない日本人が可哀想になってしまいます。米国の対日批判 対日要求のあまりの身勝手には、憤慨していますが、貿易摩擦解消の為にも、そして子孫の将来の為にも宮沢喜一氏ではありませんか。資産培養、社会資本の充実を早急に推進しなければならないと感じる今日此頃です。

また両国は、教育水準も高いようで、英語が通じる割合がぐんと増してきます。バスの中で、大学院生と話す機会を得ましたか。彼は、日本の技術的発達と勤勉による国力の充実を絶賛し、自国の可能性は信じつつも、現在の行き詰った経済状態を嘆いていました。アルゼンチンの日本人社会、駐在員社会の中では、「アルゼンチンの人々は、表面では、南米の一員として振る舞っているけれども、本音では、ヨーロッパの一員として扱われたい気持ちが強く、目はヨーロッパばかり向いている。そして、ブラジルと同一視されることを最も嫌がる」というのが

通説になっていますが、その大学院生は、ブラジルの勇気（累積債務は莫大なものだが、それでも、そのお金は、ブラジリア建設や他の社会資本投資として使用され、子孫に財産を残している）を讃美称え、「自国の対外債務は、何の為に使われたのやら、雲散霧消してしまっている」と嘆嘆嘆っていました。

アルゼンチンは、食料は勿論、必要資源もほぼ完全に自給できる国だけに、人口の増加と人々の欲が相俟つければ、これは恐ろしい国になるなどと考えながら、アンデスを越えてチリに入りました。

【チリ】

チリは南北に細長い為、気候も北部の砂漠地帯、中部の温帶地域、そして南部の氷河地域と多様です。このうち、南部は、人口も少なく、産業も皆無に等しいということなので、小生は中部温帶地域と北部のアタカマ砂漠に足を踏み入れました。

中部温帶地域は、気候も温暖で、風景が驚くほどよく日本に似ています。湖にその雄姿を写し出す富士山そっくりの山もあります。国全体が、アンデス山脈と太平洋に挟まれてはいますが、地図帳でイメージするほどには、この中部平原は狭くなく、かなり広大だと言えるでしょう。ここでは、小麦や果物の栽培、そして（残念ながら、アルゼンチンよりはるかに痩せた牛が多いのですか）牧畜が営まれています。実際レストランで食べる肉は、アルゼンチンのそれか、圧倒的においしく、チリのそれは、かなり貧が落ちるよう感じられました。

北部のアタカマ砂漠は、バスで北上するにつれ、はじめは、サボテンや僅かの草木が生えていますが、次第に草木一本生えていない不毛の地が果てなく続くようになります。小生、大きな砂漠を見るのは、はじめての経験だったのですが、アタカマ砂漠でさえ、あれだけ広大なわけから、中国西域のゴビやタクラマカン、アフリカ北部のサハラは、一体どんな砂漠なのだろう、との想像もできぬ広大さに想いを馳せていました。しかし、この不毛の地は、チリにとって最も重要な地下資源地帯で、鉄、銅、硝石などは、外債獲得に大いに

貢献しています。小生、このアタカマ砂漠のど真中にある、チユキカマタ銅鉱山（世界一の露天掘り銅山）に行きましたが、その壮大さには感動しました。このチユキカマタで驚いたことが二つあります。

ひとつは、この鉱山町が予想外に近代的で清潔だということです。先にも述べましたように、ブラジルの鉱山町が、ひとかぎりだけに、まさしくても、その延長線上で考えていたのですか？ 実際は大違ひ。砂漠のど真中にある鉱山町にしては、非常に美しいオアシス都市でした。

いまひとつは、このチユキカマタ鉱山で活躍する工作機械やトラックなどが、ほとんど「日本製だ」ということです。神戸製錬所製の工作機で岩を削り、小松製作所製の大トラックが、鉱石を運んでゆくのです。半分全体でも日本車で溢れかえっているのですからこんな砂漠のど真中の鉱山町にまで、「TOYOTA」「NISSAN」「ISUZU」「PIONEER」「NATIONAL」などの看板が掲げられているのです。既に2週間以上も孤独な旅を続けていただけに、このような困境の地における祖国日本の活躍は感無量でありました。

半分の社会についてますオーナーに感じたことは、ブラジルほどではないにせよ、アルゼンチンやウルグアイに比べるとかなり貧しいということです。アルゼンチンやウルグアイは、ほとんどが中産階級ということで、実際そのような印象を持ちましたか？ 半分は、中産階級が比率としては一番多いものの、かなりの低所得者層も存在しているようです。アルゼンチンと異なり、少し小さな町に行くと、貧しそうな人々が目立ち、諸施設も不便になります。サンチャゴという大都市でさえ、ブラジルに多く見られる「新聞売り」や「果物売り」といった非生産的労働に従事する人が目立ってきます。（妻子がいるであろうと思われる壮年の人が新聞を持って信号待ちの車やバスの乗客に売り込むのです）

半分は教育水準の高い国だけに、この貧しさは信じられないような気がしますが、国土の存在の仕方が（南北に長く、細いというように）^的非効率であり、且つアンデス山脈と太平洋によって完全な孤島となってしまっていることが、その主な原因でしょうか？

小生が、もう一つ、その原因ではないかと考えていることは、人口との

関係です。スウェーデンかいかに豊かな国とはいえ、その人口が少なすぎるので、たとえば出版業といった業界は、伸びようがありません。日本の出版業が隆盛を極めているのは、日本語という世界では、全くの特殊語でありながら、1億2千万という人口を擁し且つ教育水準が高いことが原因でしょう。たとえば、あまりよくありませんでしたが、手には開発可能な土地や、住むことが可能（というより快適）な土地が、まだまだ大量に存在しているのです。先に述べた中部平原地域にも農地・牧地、いづれにも属さぬ土地がかなり多く見られるのです。1000万人の人口でも、まだ貧民層がいるのに、この上人口が増えたら、さらに平均の生活水準が下がると思うのは、全くの間違いで、教育水準の高い國すなむち良質の労働力を提供できる國においては、もう少し多くの適正人口があるはずです。人口が少ない過ぎる國では、やはりPowerを感じることができません。

とは言え、文化的には、アルゼンチンと同じく、全くのヨーロッパ社会で、今後人口増を求めるような傾向がでてくるとは思えませんので、現在の条件下での豊かさを追求してゆくのでしょう。

最後になりますが、戒厳令が布告されていることもあり、チリにおいては「軍政」ということを強く意識させられました。バスや車は、至るところで検問を受け、銃を持った軍人が町を闊歩（夜中と早朝）していました。これこそ朝日新聞の言う「軍政」でしょう。

（TELE 小生の入り口は、3月初めの大地震後1週間でしたので、ちょうど戒厳令が強化されている時でした）

（3）旅行を終えて

この旅行を通して、見聞は大いに広かり、様々なことを考える良い契機となりましたか、最後に総合的な印象と、日本との関連について簡単に感じたことを書いてみたいと思います。

この報告書（？）において小生は、各国の可能性に言及しながらも、アルゼンチンやウルグアイの豊かさ、又チリやブラジルの相対的貧しさを、現実問題として強調してきました。しかし、今改めて、各国の特徴

を思い出しますと、少し面白いことに気が付きます。といいますのは、「豊かさ」を基準にしますと、アラジルが最下位に位置しますか、これが「近代化」を基準にしますと、アラジルがトップに位置することに気付くのです。たとえば、アルゼンチンやチリでは、電話局に行かなければ、国際電話はおろか、州間電話もかけられません（~~など~~も例外はあります）。ところがアラジルでは、どこの電話からでも、直通ダイヤルで国際電話をすることがでできます。また、アラジルは至る處に立体交差の道路がありますが、アルゼンチンはほんの一部、チリでは皆無です。この違いは、一体何處から出てくるのでしょうか？勿論、様々な解答が可能で、各々の解答に一理があると思いますが、その包括的なものは、文化の相違、目標とする社会の違いではないかでしょうか。アラジルは基層こそヨーロッパ文化ですか、近代化努力の過程で、かなりの部分は、アメリカナイズされ、目標とする社会もアメリカ社会（大量消費社会、便利追求社会）ではないかと思われます。それ故、将来的に大いに役に立つこと、便利になると思ったことは、積極果敢に実行してきました。（勿論、外資の導入によってですか）これに対し、アルゼンチンやチリは、ちょうど、フランスの主婦が頑固なまでに、アメリカ的インスタント食品、簡易食品を拒否し、昔ながらの自慢のフランス料理を作り続けているように、固りが如何なる趨勢にあるうとも、「俺は俺、我が道をゆく」とは“かりに”伝統を守り続ける傾向があるよう思われます。

その結果は、アラジルは開放的で近代化も進んでいるか、その過程で貧富の差が増大してしまい、全体的（平均的）には最も貧しい国に甘んじてはいる。そして、アルゼンチンやチリは、我が道をゆく過程で、全体の生活水準は向上しているものの、近代化は遅れてしまっている、ということになっているのではないかと思われます。

こういった状況にある、これらの国々と日本の関係は、一体どのようなものが望ましいのでしょうか？

日本が今他国に貢献し得る最大の武器は、技術と資本です。アラジルが、今一番求めているものは、教育水準の向上と、やはり資本です。しかし、アラジルが求める資本は、その資本投下のメリットが、外国に基

ち去られるのではなく、再び、国内に向けられるような性質のものです。それ故、日本政府や日本企業がブラジルに対する際には、外国としてではなく、ブラジルの一員になりきったような発想と行動が必要だと思います。「ブラジルの発展によって、30年後には、日本本国にも利益が還元されるであろう。それまでは、利益を持ち帰るという発想は捨てよう」というぐらいの心構えが必要でしょう。(勿論、「企業は永遠なり」を地でゆく為には、毎期、利益を出さねばならない企業にとって、「今日の50より明日の100」を実行することは容易ではないと思いますか。)

これに対し、アルゼンチンやチリに対しては、文化的にも閉鎖的な色彩が強い為、相手の需要に応じて、当方で提供し得る最大の生産物やサービスを供給してゆくという取引・ビジネスの当事者として最も紳士的な言動を取り続けてゆくことが大切だと思います。たとえば、近い将来、アルゼンチン・チリでは、通信施設の充実といった需要が出てくると思うのですが、資本投下と技術的優位が絶対条件のこの分野においては、アメリカと並んで、日本もビジネスライクではあるが紳士的なその供給国として期待されると思います。我々商社マンとしては、期待されるように努力しなければならないと考えます。

又、チリの鉱物資源、アルゼンチンの肉や小麦については、反対に購入者として取引の当事者になり得るような関係を作っていくにはならないでしょう。(前者は、チリ側も現地点でかなり満足でしょうか、後者については、アルゼンチン側に、量的問題をはじめとする不満があると思われます。)

南米各国は、「南米」という一言で片付けられない様々な特徴を持っています。それ故、各国の状況に応じて関係を地道に作り上げる必要性を痛感させられた旅でした。

以上、旅行の見聞を通して、見たこと、感じたこと、考えたことなどを書いてきましたが、些細なことが多かったり、既にご存じのことがあつたりしたにも拘らず、最後まで読んで戴いてありがとうございます。

見たことや事実については問題ありませんが、感じたことや考えたことについては、小生の独断と偏見ばかりですので、少し割り引いてお考え下さい。

小生の研修生活も残すところ 2ヶ月となってしまいましたが、もうと広い見地、もっと深い思索に基づいて物事を見る事ができるよう心掛けながら、悔いのない生活にしてゆきたいと思っておりますので、今後ともご指導の程、宜しくお願ひ申し上げます。

いつも同じ文句なのですか。末筆ながら、知事のご健康と益々のご活躍を、そして郷土大分の暮らしの発展と、地球の裏側よりお祈りしています。

平松守彦様

昭和60年4月24日

吉良州司

P.S. この手紙は4月20日に書きはじめたのですが、途中、急用で Rio de Janeiro に行かねばならないことになり、今日、24日に書き終えました。この間、新大統領 タンクレード・ネービスか、21日夜、神に召されることになりました。人々の悲しみ様は大変なものですが、彼らと共に、新大統領の冥福を祈りたいと思います。知事におかれでは、本当に暮々もお身体に気をつけて下さい。